溺愛監禁

企画：bonecage
脚本：鳥下ビニール

※この台本は実際に収録に使われたものときわめて近いですが、当日変更になったセリフ等もあるのに微妙に異なったりもしています。

キャラ設定

■鷹司　秀（たかつか　しゅう）　以下　鷹司
三〇歳、大柄。
とあるグループ会社の跡取り予定。
今は外資系企業に勤めている。
この街に引っ越してきたヒロインを、偶然見かけて一目惚れする。
以来、ヒロインの住んでいる部屋の下の部屋に住みながら、ずっと誘拐の準備を整えていた。
ヒロインの拒否は、照れ隠しやちょっと度を越したわがままだと思っている。
とはいえ社会的常識がないわけではないので、外面はよく平気で人に嘘をつく典型的なサイコパス。
父親も同種の人間で、母親は常に父親によって監禁されていたので、自分もあんなふうに奥さんを大事にしたいと思っている。
穏やかかつさわやかな語り口だが、思い通りに事が運ばないと静かに怒る。
自分とヒロインだけの世界に浸りたいので、ヒロインがその世界から逸脱するなら「多少厳しくしても常識を教える」必要があると思っている。きっとヒロインもいつかは全部わかってくれる。だって全部僕が正しいんだから。
どんな変態プレイも「別に普通でしょ」と思ってる。
全体的に「凌辱シーンがガッツリある監禁ホラーもの」だと思って演技していただくと齟齬がないと思います。ヒロインは決してデレませんし永遠に愛は芽生えません。
憎悪と恐怖と苦痛だけがあります。

■ヒロイン
最近この街に引っ越してきた。
単身者用マンションで、伸び伸びと一人暮らしを楽しんでいたが、狂人に見初められた結果、人生を詰む。

トラック1　おかえり

自宅マンションに帰ってきたら、
知らない人が部屋で待っていたヒロイン。
間取りは1DK。
手錠をはめられ、美味しい食事を振舞われる。

SE：鉄扉の開閉
SE：電気付ける音

【5】
鷹司「おかえり。今日も一日お疲れ様」
【ヒロイン、ぎょっとして振り向く。悲鳴を上げようとするヒロインの口をふさぐ鷹司】

【1】
鷹司「待って待って！　叫ばないで！
大丈夫、怖くないから、話を聞いて……！」

SE　揉み合う音
SE　壁に押さえつける

鷹司「しぃ、しぃー……落ち着いて、静かに。
痛いことはしたくないんだ。
――うん、いい子だ。
ごめんね、びっくりしたよね。
大丈夫。ちゃんと説明するから」
鷹司「初めまして。僕は鷹司　秀。
一年前から、ここの真下の部屋に住んでます。
君は気づいてなかっただろうけど、
ずっと君のこと見守ってたんだ。
――ずーっとね」

【ヒロイン「ずっとって……？」】

鷹司「ずっとは、ずっとだよ。
今日も会社で君が頑張ってるの、聞いてたよ。
新人ちゃんのフォローしてあげてたでしょ？
頑張ったね。えらいえらい。」

【ポケットをやたら気にするヒロイン】

鷹司「ん？　どうしたの？　落ち着かないね。
　――あぁスマホか。
　もしかして、仕事の連絡しなきゃいけない感じ？
　だめだよ、せっかく二人きりになれたんだから、
　僕に集中してくれないと。
　僕が預かっておくね。
　えーと……君の、どこかな……たぶん……」

SE　衣擦れ

【3】

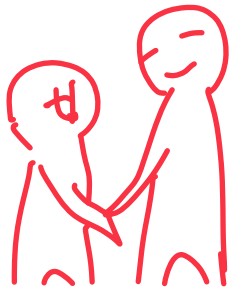
鷹司「ああ、やっぱり。右のポケットだ。
　いつも、そこに入れてるもんね」

【鷹司、ヒロインのポケットからスマホを取り出し、自分のポケットに】

【1】

鷹司「ねぇ、お腹すいてるでしょ？
　びっくりさせようと思って、晩御飯つくって待ってたんだ。
　全部君の好物だよ。
　今日は初めて君と会う日だから、豪勢に行こうと思って。
　ほら、怖い人じゃないだろ？
　ねぇ、嬉しい？
　ほら、準備するから、こっちきて」

【ヒロインの手をひっぱる鷹司】



鷹司「あれ？　手、震えてるね。
　もしかして、照れてるの？
　手を繋ぐだけで照れちゃうなんて、かわいいなぁ。
　想像していた通りだ。」

鷹司「それに、この手……すごくなめらかで、柔らかい。
でも、ちょっと冷たいな。
【心配そうに】寒い？
【優しく】僕の手、あったかいでしょ。
やっと会えてドキドキしてるから、
体温上がっちゃってさ」

鷹司「僕の心臓、触って確かめてみる？
ふふ、恥ずかしいか。
じゃあ、もうちょっと緊張がほぐれてから、ね？」

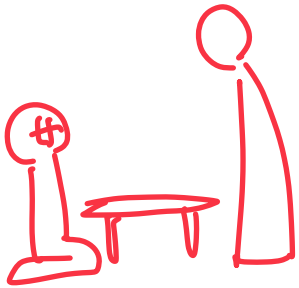
鷹司「知ってる？
握手をして気持ちいい相手とは、
セックスの相性もいいんだってさ。
僕らの相性は、ふふ…とーっても良さそうだ」

SE　居間へ移動
ヒロイン座る（鷹司は立ったまま）

【座ってるヒロインを見下ろす鷹司】

【9】

鷹司「晩御飯の用意するから、座って待って
て。
おっと、動かないでね？
恥ずかしいからって逃げ出されたら、
すっごく傷ついちゃうな。
約束できる？　逃げないって」



【ヒロイン、恐怖でうなづく】

鷹司「よかった！
じゃあ、これもつけてくれるよね」

SE　手錠をヒロインに差し出す

【ヒロイン「これは何？」】

【きょとんとして
鷹司「何って…手錠。ああ、ほら見て、手錠の内側。
ベルベットとクッションで保護してあるんだ。
これなら痛くならないし、安心だろ？
君のために、特注で作らせたんだ」

【ヒロイン「そんなものつけたくない……！」】

鷹司「……つけたくないの？」

【鷹司、ヒロインの正面にしゃがみこむ】

【1　至近距離】
鷹司「【低い、怒る直前の猫撫で声（暗黒微笑）】
どうして？　逃げないって約束したよね？
なのに手錠は嫌なの？

手錠があると困るようなこと……するつもり？
もちろん、僕は君を信じてる。
約束を破るような子じゃないって、知ってるさ」

鷹司「でも、もしそれが僕の勘違いで、
思ってたよりわがままな子だとしたら……」

【3　耳元】
鷹司「一度、何が起こるか教えてあげないといけないなぁ。
悪い子のふりして、僕をあおってる？
夕食よりも、僕が欲しいってこと？」

【ヒロインが手錠つける】

SE：金属音

【鷹司、態度を一転して優しくなる】

【1　少し離れて】
鷹司「ああ、いい子だ。
思ってた通り、とっても似合う」

鷹司「ほら、思ったより不便じゃないでしょ？
鎖は長めにしておいたから――
それをつけたまま僕と抱き合う事もできる」

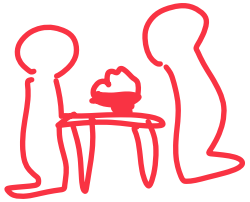
【1→9　しゃべりながら離れる】
鷹司「あぁ、でも今はお腹が空いてるよね！
待ってて、すぐに用意するから」

SE：遠ざかる足音

トラック2　はじめての歯磨き

ヒロインとの食事のあと、ヒロインに無理やり歯磨きさせたり、着替えのためにハサミで服を切り裂く鷹司。

【1　机を挟んで真正面】
鷹司「さぁ召し上がれ。
どうしたの？　食欲ない？
今日は、お昼食べ損ねてたでしょ？
お腹、減ってるはずだけど」



鷹司「やっぱりちょっと、手錠が邪魔なのかな……。
じゃあ、僕が食べさせてあげる」

SE：食器かちゃかちゃ

鷹司「はい、あ～ん。」

【甘やかすように】
鷹司「どうしたの？　ほら、口開けて。
もう……僕を困らせて楽しんでるの？
ご飯の時は遊んじゃだめだよ。
もしかして……僕が食事に変なもの混ぜてるか、
疑ってる？」

鷹司「ひどいなぁ……。
ただ君に、僕の作ったものを食べてほしいだけだよ。
本当はずっと、僕以外の誰かが作ったものなんて、
君には食べてほしくなかったんだ。」

【軽く苛立って】
鷹司「ここまで説明してるのに……
どうして口を開けない？
口をこじ上げて無理やり食べさせられる方が、
好みなのかな？
僕が噛んで、口移しで食べさせてあげようか？」

【ヒロイン口開ける】

鷹司「【機嫌よく】そう……いい子だね。
もぐもぐ、ごっくんって。
あはは、上手上手。
ほら、美味しいでしょ？
手料理を食べてもらうのは初めてだから、
なんだか照れくさいな」

鷹司「ほら、ね？
何も変なものは入ってなかった。
僕が嘘つきじゃないって、わかってもらえたかな。
ほら、もう一口。はい、あーん」

【ヒロイン、自分で食べると申し出る】

鷹司「あぁ、だめだめ。スプーンは返してあげない。
大丈夫。ちっとも迷惑じゃないから。
こうして食べさせてあげるのも、楽しいもんだよ。」

鷹司「君の可愛い口が、雛みたいに開いて、閉じて。
僕が作ったものを唾液でぐちゃぐちゃにして、
飲み込んで、そのまま血肉にしていくのを、
特等席で見れるんだから。」

【読みながらだんだん狂人度上げる】
鷹司「ああ……本当に可愛い口だな。
そうそう、よく噛んで。
君が僕のを、美味しく食べてるところ、
よく見せて。
あぁ、すごい…可愛い口、可愛い歯。
いっそ、僕の事も食べてほしいなぁ……。
君が僕の肉を食いちぎって、
溢れた血をすすって、飲んで、
僕の体が君の血肉になっていく。
僕と君が一つになるんだって思うと、
僕は……！」

【我に返って】
鷹司「あぁ、ごめん。
急に言われても、困るよね。
生肉をかじるなんて、抵抗あるだろうし……
君は少食だから、もうお腹いっぱいだよね。
大丈夫、それはまた今度、
君がその気になってからでいいよ。
やりたいことは、ほかにも色々あるんだ。」

【甘やかす感じで】
鷹司「はい、最後の一口。あ～ん。
よかった、全部食べてもらえて。
すごく嬉しい」

SE：立ち上がる鷹司

【1→3（テーブル回り込んで隣へ）】
鷹司「食器を片付ける前に、歯磨きしちゃおうか。
君はいつも、食べてすぐに歯磨きするタイプだもんね。
おいで。歯磨きも手伝ってあげるから」

SE：ヒロインもためらいがちに立つ
SE：洗面台に行く足音（二人分）
SE：コップに水を注ぐ

【鷹司、鏡を見ながらヒロインの背後に立つ】

【4】

鷹司「さぁ、口を開けて。かわいい歯がよく見えるように。」

【ヒロイン、自分で磨くと言い張る】

鷹司「こーら。わがまま言わない。手錠が邪魔で食事も難しかったのに、歯磨きなんてできるはずない。そうだろう？」

鷹司「虫歯になると大変だからね。ほら、はい、お水。まずは軽く口をすすごっか。」

【3】

鷹司「それとも……【意地悪く】お水、口移ししてあげようか？すすいだあとの水も、僕が飲んであげようか。」

【ヒロイン「……自分でやります」】

【4】

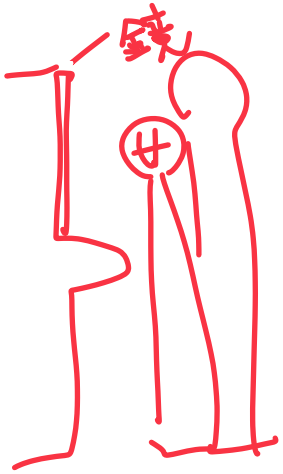
鷹司「あはは。ざーんねん。もっと甘えてくれてもいいのに。はい、コップ。上手に出来るか、見ててあげる」

【ヒロイン自分でコップ持って口をゆすぐ】

SE　洗面台に一口分くらいの水を吐く音

【甘い感じで】

鷹司「よくできました。こっちを向いて、口を開けて。磨くのは僕がやってあげる。」



【1】
鷹司「ほら、嫌がらないの。あ～ん。
もっと口開けて……ピンクの可愛い舌見せてよ。
ああ、これ触ったら、
すっごく柔らかいんだろうな……。
でも、今はまだ我慢……。まずは上の歯から……」

〈SE　歯磨き、シャコシャコ音ここから〉

鷹司「うん、いい感じ。
次は下の歯、みがくからね。
あぁ……君が僕の言いなりになって、
無防備に口開けてるの見てると……ドキドキする。
どんな君だって可愛いけど、素直な時は格別に可愛い」

〈SE　歯磨ここまで〉

鷹司「うーん、よし。
きれいに磨けたんじゃないかな。」

【鷹司、ヒロインを洗面台に伏せさせる】

【4】
鷹司「はい、ぶくぶくして～」

〈SE　洗面台に一口分くらいの水を吐く音〉

鷹司「よくできました」

【1】
鷹司「じゃあ、ちゃんときれいに出来たかチェックしようね。
見た目だけじゃわからないから、
僕の舌で、確認してあげる。」

【ヒロイン、嫌がる】

鷹司「だめだよ、抵抗したら。
優しくできなくなるだろ？
ほら大人しくして、口開けて【セリフ言い終わりから
ディープキスへなだれ込む】」

【キスしながら】
鷹司「ん、はぁ……やらかい舌……
ほら、口閉じないで。
ちゃんと磨けてるか、確かめないと……
あー、ヤバ…ヌルヌルで、あったかくて、
ちょっとミントの味がする」

鷹司「ね、もうちょっとだけ、ちゅーさせて。
ずっとこうしたかったんだ……
君がこの部屋に引っ越してきた時から、ずっと」

【10秒ほどキス音】

鷹司「はぁ、きれいに出来てたね……。
これで歯磨きはおしまい。
あぁ、楽しかったぁ。
明日からもずっと、僕が磨いてあげるからね。
あーあ、顔、涙でぐちゃぐちゃ。
気持ち良すぎて泣いちゃった？
じゃ、もう一回……」

【ヒロインが拒否したので、残念そうに】

鷹司「遠慮しなくて良いのに。
お口の中もさっぱりしたし、服、着替えちゃおうか。
いつまでも仕事着だと、苦しいでしょ。」

SE：洗面所の引き出し開ける

【3】
鷹司「部屋着は、この引き出しだよね。
今日はどれにする？
この青いやつが君のお気に入りだっけ。
【ふと気づいて】――あ、これ……
このにおい……」

【部屋着に顔埋めて深呼吸】

鷹司「【しみじみ】君の匂いだ……いい匂い。
あ、ごめん。当たり前のことなんだけど、
ちょっと感動しちゃって。
ほんとに君の部屋にいるんだなぁって……
【照れ笑い】勇気を出して、よかった。」

鷹司「あれ？　でも……あぁ、そっか。
手錠をしたままじゃ、着替えられないよね。
順番まちがえちゃったな。」

【ヒロイン、外してもらえるのかと期待する】

鷹司「いや、手錠ははずさないよ。
手錠のまま着られる服を、明日中に用意するよ。
今夜注文しておけば、明日の夜までにはできてるから。
それまでは暖房を強く入れて、
パジャマを羽織っておけばいいか」

【3　耳元】

鷹司「【楽しそうに】でも脱がすのは……
服、切っちゃわないと。ね？」

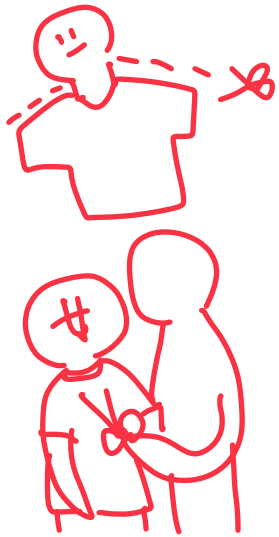
SE　ハサミ取る
SE　【7】耳元でシャキシャキ

【1　至近距離】

鷹司「まずは裾からエリまで……
しぃ……！　動かないで、
危ないから」

SE：ハサミで袖から襟までを切り始める（右袖&左袖）

鷹司「そう、いい子だ。
そのままじっとしてて。
大丈夫、これでも割と器用な方だから。
あとはおへそのところから首まで切れば……」



SE：その後、ヘソらへんから首元へ

鷹司「ほら、上手に脱げた。
ふふ……あぁ、これ。
かわいいブラジャーだなって、
いつも思ってたんだ。僕のお気に入り」

鷹司「あれ？　……泣いてるの？
【慌てて】ごめん。この服、もしかして気に入ってた？
【媚びて】今度同じもの買ってきてあげるから、
そんなに怒らないで。ね？」

鷹司「ほら、次は下だ。僕の肩に掴まって
ホックも、ファスナーも、
ちゃんとはずしてあげるから……」

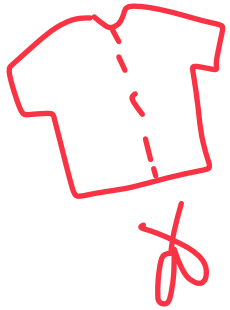
ＳＥ　プツン　ジジー
ＳＥ　ヒロイン、もがく

【ちょっと不機嫌に】
鷹司「こら、暴れない、暴れない。
どうして抵抗するんだ……？」

鷹司「――ああ、もしかして……恥ずかしいの？
なぁんだ！　そっかそっか、君は照れ屋さんだもんね。
かわいいなぁ。
でも、これからは毎日、
僕が着替えさせてあげるんだよ？
恥ずかしくても我慢して、早く慣れなきゃ。」

【ヒロイン「毎日……？」】

【きょとんとして】
鷹司「そりゃそうさ。
だってこれからは一緒に暮らすんだよ。
僕は、恋人が家で待ってるのに、
自分勝手に外で遊びまわるような
ひどい男じゃないからね。
あ――こら！」



SE：激しく抵抗
SE：ものが落ちたりカップが割れたり

【鷹司、暴れるヒロインを壁に押さえつける】

SE：ヒロイン足を滑らせて転ぶ

鷹司「あぁ、びっくりした。
急にどうしたの？
ずっといい子にしてたのに。
そんなに僕の前で脱ぐのが恥ずかしい？
仕方ないな……
無理やり脱がすよ。いいね？」

SE：ヒロイン、もがく

【テンションが上がっていく】

鷹司「ははっ、それ、本気で抵抗してるのか？
あんまり弱々しいから、じゃれてるのかと思った。
でも気を付けて。こんなに細い腕じゃ――」

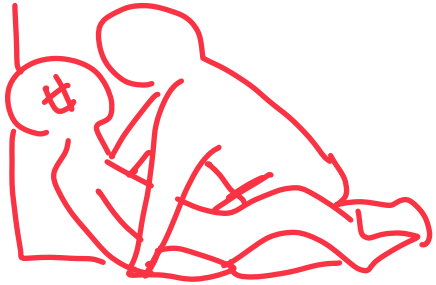
【3　耳元】

鷹司「うっかりして折っちゃうかも」

SE　ストップ

【1　至近距離】

鷹司「あれ？　もう抵抗しなくていいの？
心配だなぁ……
こんなんじゃ、もし悪い奴が襲ってきても、
君はされるがままだ。
なぶられて、壊されて、殺されちゃうかも。
だって、君はこんなにかわいいんだもの。
みんな君を狙ってる。
そうなる前に、ここに来られてよかったよ。
これからは僕が、ずーっと、ずーっと
守ってあげるからね」



SE：衣擦れ

鷹司「さぁ、パンツも脱いじゃおうか。
大丈夫、恥ずかしくないよ。
君の体、すっごく綺麗だ。
……いい匂い、やっぱり実物は全然違うな。
カメラ越しの映像なんかとは、解像度が段違いだ。
たまらないよ。」

【1　少し離れて】
鷹司「あれ……？
寒いのかい？　鳥肌立ってる」

【1→7】
鷹司「もう、裸で暴れるから……
あったまるもの出してあげるから、ちょっと待ってて。
ちゃんとパジャマ、羽織っといてね」

〈SE：遠ざかっていく足音〉

トラック3　はれて恋人

洗面所から居間に移動し、ヒロインに暖かい飲み物を出す鷹司。
そのまま強姦になだれ込む。

SE：マグカップでホットミルクにココア混ぜる音
SE：近づいてくる足音

【1】
鷹司「はい、君の好きなココア。
ちょっと熱いから、フーフーして飲んで。
いらない？　でも、寒いでしょ？
飲んで、体の中から温めた方がいい。
一人じゃ飲めない？
じゃあ、僕が飲ませてあげる。」

【口移ししようとするが、ヒロインが抵抗してココアがこぼれる】

鷹司「あっと……あーあ。こぼれちゃった。
もう一度。さあ、口を開けて。」

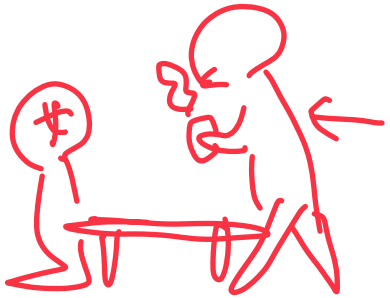
【鷹司、ヒロインに口移しからのディープキス十秒くらい】

鷹司「ほら、上手に飲めた。
甘くてすごく美味しかったね。
でも、ちょっとこぼれて、体に掛かっちゃったな。
拭いてあげる」

【1　至近距離】
鷹司「……柔らかい肌。火傷してない？
赤くはなってないけど、触って確かめないと」

SE：皮膚を滑る布

鷹司「拭いても甘い匂い、取れないね。
タオルじゃ拭ききれないのかな。
じゃあ……僕がきれいに舐めとってあげる。」



【1　下から、全身舐めながら】
鷹司「ん……やっぱり、甘い。
これって、ココアの味？
それとも君の肌の味かな。
わかんないや。どこ舐めても甘くて、美味しい。
あぁ、夢みたいだ。【舐めるのここまで】」

鷹司「あれ？　乳首、固くなってるね
舐められて、興奮しちゃった？
かわいい。
ココアはこぼれてないけど……
ここもたっぷり舐めてあげる」

【30秒ほど胸舐める】

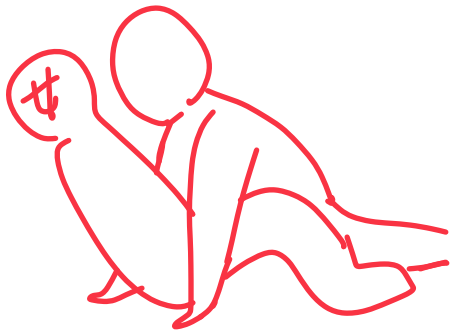
鷹司「【舐めながら】反対も、可愛がってあげる。
こっちは、手で我慢してね。
大丈夫、優しく触るから。
もう、怖くないよね…ん、腰…ちょっと揺れてる……【乳舐めここまで】」

【7　耳元】
鷹司「もしかして、濡れちゃった？
ねぇ、見せて……
恥ずかしがらなくていいよ。
君が僕に舐められて感じちゃったんだって、
この目で確かめたいんだ。
ほら、脚ひらいて……」

【ヒロイン、かたくなに足を開かない】

鷹司「……どうしても嫌なの？
こんなにお願いしてるのに？」

【1　離れて】
鷹司「――あぁ、そっか。
ベッドじゃないと、嫌だよね。
ごめん。よっとがっついちゃった。
ヨイショっ」



SE：抱き上げる

【鷹司、ヒロインをお姫様抱っこするが、ヒロインは暴れる】

【3】

鷹司「おっと、そんなに暴れないで……！
ほら、危ないから！
大丈夫、全然重くないよ。
一応、鍛えてるからね。君のために。
ほら、たくましくて男らしい人が好きって、
言ってただろ？」

SE：室内を歩行する音
SE：ベッドにヒロインをどさり

【ヒロイン、逃げようとするが鷹司にベッドに押さえつけられる】

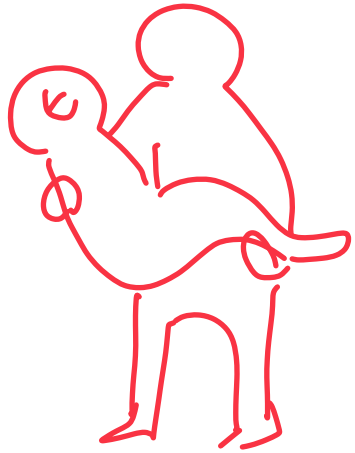
【1　見下ろす距離で】

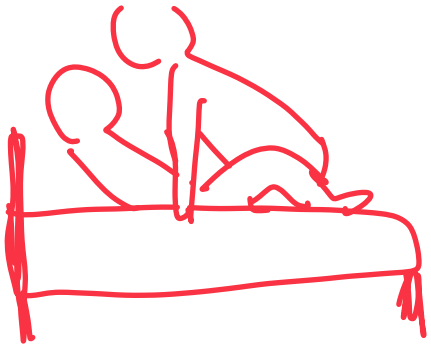
鷹司「【笑いながら】ダメだよ。
暴れたって逃がさない。
あぁ……いい眺め。
毎晩、君がここで寝てるのをカメラで見て、
おやすみを言ってたんだよ」

鷹司「これからは毎晩、君からもおやすみって、
言ってもらえるんだね。
嬉しいな……嬉しくてどうにかなりそうだ」

【ヒロインが恐怖のあまり泣き出す】

鷹司「どうして泣くの？
ああ、そんなに目をこすったら、
赤くなっちゃうよ」





【3】
鷹司「【子ども扱い】よしよし、大丈夫。
僕が守ってあげるから。
もう何も頑張らなくていいんだよ。
嫌なことは、全部僕が無くしてあげる。
だって、僕は君の恋人なんだから」

鷹司「そう……僕は君の恋人だよ。
今日、恋人になったんだ。
なぁに、その顔。まさか違うなんて言わないよね？
だって、もうキスもしたじゃないか。
それとも君は……」

【3　耳元】
鷹司「【少し張りつめて】恋人じゃなくても、
あんな深いキスをするの？」

【1】
鷹司「ふぅん……知らなかったな、
君はずいぶんと奔放なんだね。
じゃあ、どこまでした男なら、
君の恋人を名乗っていいのかな」

【1　至近距離】
鷹司「【軽くキスしながら】
こうやってキスしただけじゃ、まだ知らない人？
胸も舐めたあげたよね？　それじゃ足りない？
なら、もっと先に進まないとね。
【キスここまで】」

鷹司「【威圧的に】脚、ひらいて。
怖がらないでよ、さっきから優しくしてるだろ。
本当に怖いってどういうことか、
教えてあげないとわからない？
酷いことをされないと、こんな簡単なお願いも
聞けないのか？」

【ヒロイン渋々足を開く】

鷹司「【ため息】最初から、
そうやって素直にしててくれれば、
僕だって怖い声を出さずに済むんだ。
そのまま、足開いてて。閉じたらお仕置きだからね？」

【鷹司、膝立ちになる】

【1　下から】
鷹司「【嬉しそうに】ちょっと濡れてる。
やっぱり、さっきの気持ちよかったんだ？
僕にこんなところ見せてくれても、
まだ恋人じゃないの？
そう…うんと気持ちよくなってみれば、
君も僕が恋人だってわかるかな
まだ指を入れるには早そうだから、
舌で良くしてあげよっか。
大丈夫、絶対痛くないから。約束するよ。」

SE　水音

【30秒程度ヒロインの秘所舐める】

【このセリフから次の指定まで、いい感じになめつつ喋りつつ】
鷹司「気持ちいい？
腰がピクピクしてる。
声、抑えないでいいよ。
あぁ、お隣さんには聞こえちゃうかもね」

鷹司「君のこんなかわいい声、
他の奴らに聞かせるなんて、もったいないな。
ごめん、やっぱり声、我慢して……
一番敏感なとこ、いーっぱい舐めたげる。
どう？　僕が恋人かどうか、まだわからない？」

鷹司「強情だなあ…
ここは、こんなに濡れてるのに。
舌だけじゃ足りないか……
じゃあ――」

〈SE：指を入れる水音〉

鷹司「ほら、指もこんなに簡単に入っちゃった。
僕がこうやって舐めるたびに、
きゅうきゅうしめつけて来てる。
まだ認めない？
じゃあ、指増やしてみようか」

〈SE：水音派手になる〉

鷹司「ふふ……気持ちよさそうな声。
君のここ、いーっぱい濡れてるから、
二本入れても全然平気だね。
こうやって中を触ってると、君が感じてるって
よくわかる。」

鷹司「こんな風に、奥の方、ちょっと強めに
こすられるのが好きなんだ？
やらし〜。」

鷹司「吸ったり舐めたりしてる時に、
いっぱい濡れてくると、すごく嬉しい。
…中、狭くなって来たね。
イキそうなのかな」

鷹司「イくの、怖い？
【優しく】大丈夫だよ、僕がいるから。
安心して、イっていいよ」

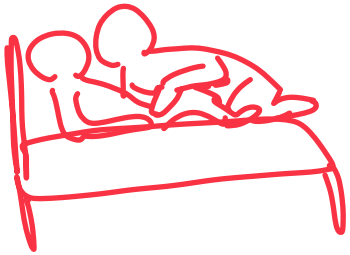
〈SE：水音加速〉

鷹司「大丈夫。
このまま、僕に身を任せて。
奥が気持ちいいの？
じゃあ、いっぱいぐりぐりしてあげるから。
たくさん感じて…ほら…ほらっ！【舐めるのここまで】」

SE：ストップ

【1　戻って】
鷹司「ああ…イっちゃったね。
体、熱くなってる。
気持ち良かったんだよね」
【否定するヒロイン】
鷹司「恥ずかしがることないのに。
腰、派手に跳ねてたね。
どう？　これでもまだ、恋人じゃない？
そっか……そうだよね」

鷹司「やっぱり恋人だったら、
ちゃんと最後までしなくちゃね。
――何をって……」
【3　耳元】
鷹司「セックスだよ。
君のえっちな姿見てたら、
僕も我慢できなくなって来ちゃった。
わかるかな？
ほら、もうがちがちで苦しいくらい。
二人でたくさん気持ちよくなって、
明日の朝目が覚めたら、僕たちはもう恋人だ。
ふふ……なんだか、そういう映画みたいだね」
【ヒロイン「こんなことしなくても、恋人だから！」】
【1】
鷹司「え……？
嬉しいな、僕のこと、恋人って認めてくれた。
じゃあ今からは恋人同士として――」
【7　耳元で内緒話のようにささやく】
鷹司「思いきり愛し合おうね……」
【暴れるヒロイン】



鷹司「あっははは！
どうしたの、暴れちゃって。
また照れ隠し？
恋人じゃないって言ってじらしたり、
恋人だって認めてくれたのに抵抗したり、
気まぐれもかわいいけど、もう限界。
一つになろう。ね？」

SE：ヒロインベッドに押さえつける
SE：カチャカチャ、ジー

【3：耳元】

鷹司「愛してるよ……」

【一息で奥まで押し込み、特にヒロインのことは気遣わずに犯し始める鷹司】

SE：挿入音
SE：水音開始（BPM80くらいでねちねち）

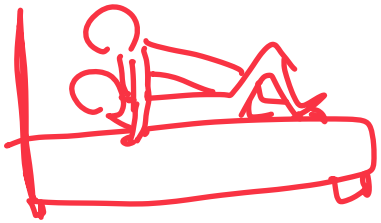
【キャストさんのセリフに合わせてSE入れてもらいますので、じりじりテンション上がってく感じでヒロインを痛めつけてください。狂人なのでヤってる最中も壊れたラジオみたいにずっと喋ってます】

【1】

鷹司「はあ、君の中、あったかくて気持ちいい…。
ぬるぬるして、うねって。すっごい締め付けて来る。
そんなに僕を離したくないんだ？
僕もだよ。僕も君を離したくない。
ドロドロで柔らかくて……想像よりずっといい……」

鷹司「ねぇ、ここで眠る君を見ながら、
僕が何回オナニーしたと思う？
想像の中でやったこと、これから全部試していこうね」

【ヒロイン、助けを求めて泣き叫ぶ】



鷹司「……ああ、いい声。
いいよ、いくらでも叫んで。
大丈夫。誰にも聞こえないから、
その声もっと聞かせて」

鷹司「突くたびに締まって、すっごく気持ちいい。
奥の方、突かれるの好き？
じゃあ、いっぱい突いてあげる。
こうやって……！
うん？　もういや？　感じすぎて怖い？
そんなに泣かないで。
僕がぎゅーって、抱きしめててあげるから」

SE：水音加速（BPM170程度でフィニッシュに向けて）

鷹司「ねえ、気持ちい？　気持ちいいよね。
僕も、すっごく気持ちいい…。
イキそう？　僕もそろそろ限界……」

鷹司「そんなに締めないで、先にイっちゃいそう。
一緒にイこう？　ね？
あ、あぁ……！
また、締まって……もう……！
あ、あぁあっ……！」

SE：ベッドの上、ヒロインの横に鷹司が倒れ込む

【3】

鷹司「同時にイケたね。
初めてでこんなに気持ち良くなれるなんて、
僕らやっぱり、運命なんだ。
――ふふ。すごい汗かいてるね。
あとで一緒にお風呂はいろっか」

【鷹司、ヒロインの頬を舐める】

鷹司「まだ、涙止まらない？
よしよし、いっぱい気持ち良くて、
びっくりしちゃったね
じゃあ――」

SE：鷹司、自分のポケットをゴソゴソ

鷹司「リラックスできるお薬、飲もうか」

【1】

鷹司「ほら、あ～ん」

【ヒロイン、泣きながら拒絶】

鷹司「【苦笑い交じりに】一人じゃ飲めない？
まったく、今日の君は甘えただな。
いいよ、僕が飲ませてあげる」

【ねっとりディープ五秒】

鷹司「うん、ちゃんと飲めたね。えらいえらい。
じゃあ眠るまで、僕が頭を撫でてあげる。
だから安心して、目を瞑って」

【3　耳元】

鷹司「……おやすみ。僕の運命の人（耳にキス）」

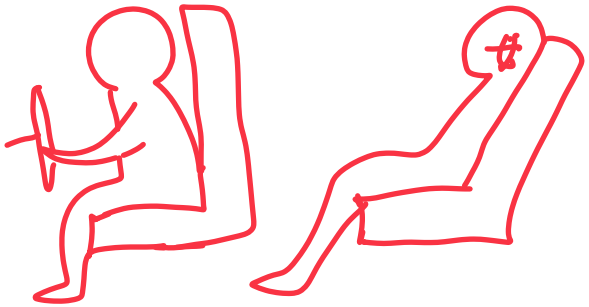
トラック4　お家へ帰ろう

薬で眠らせたヒロインを、二人の新居に拉致する鷹司

〈SE：一般道路を走っている〉
〈SE：五秒程は車の音のみ〉
〈SE：ヒロインがみじろぎしたゴソ音〉
〈SE：手錠の金属音〉

【ヒロインは後部座席におり、鷹司は運転席にいる】

【1　背を向けた状態（運転席）】
鷹司「あれ？　起きちゃった？
おはよ。気分はどう？
気持ち悪くなったりも、してないね？
よかった…強い薬を使ったし、
ちょっと心配だったんだ。
様子がおかしかったら、すぐに言うんだよ？」
【ヒロイン「ここはどこ？」）
鷹司「ここ？　僕の車の中だよ。」
【ヒロイン「どこにいくの？」】
鷹司「ふふ……さぁ、どこだと思う？
実はね、二人でくらすための新しい家を
用意してあるんだ。
広くて使いやすいキッチンと、
居心地のいい居間――
それに、僕達二人の寝室。
ほら、前に電話で話してただろ？
結婚したら、こんな家に住みたいんだって。
この家が完成したら、君を迎えに行こうって
決めてたんだ。」
鷹司「山の中だから立地がいいとは言えないけど……。
もう君は家から出ないんだから、いいよね？
これから君は、そこでずっと、僕と二人で暮らすんだ。
仕事の愚痴、よく言ってたよね？
やっと君をつらい仕事から助けてあげられる。
もう嫌いな奴と顔を合わせたり、話をしたり、
しなくていいんだ。」
【ヒロイン「家族が心配して通報する」】
鷹司「君の家族？
あぁ、大丈夫大丈夫。
今頃、君が事故死したって連絡がいってると思うよ」



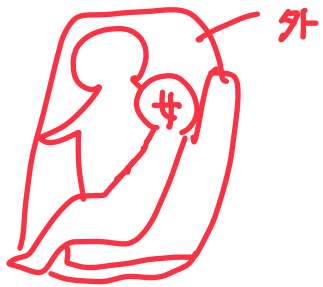
鷹司「ちょっとお金を出せばね、
背格好が似てる死体を買い取って、
君そっくりに偽装するなんて簡単にできるんだ。
だからもう、家族とも会わせてあげられないけど……
僕がいるから、いいよね？」

ＳＥ　ブレーキ

鷹司「さぁ、ついた。」

ＳＥ　前方ドア開閉
ＳＥ　後部座席ドア開く

鷹司「おいで。
お姫様だっこで、僕らの寝室に連れて行ってあげる。
楽しみだなぁ、これから毎朝、
君におはようのキスができるんだ。
君からも僕にキスしてくれる？
まだ恥ずかしいか。
いいよ、少しずつで。
時間はいくらでもあるんだから、ね」



トラック５　ただいま

監禁生活一ヶ月目くらい。
ヒロインを凌辱したおす鷹司
山奥の一軒家、玄関扉は鉄扉でカギは厳重。
さらに鷹司が外出しているあいだ、ヒロインは外
から鍵のかかる部屋に閉じ込められている。

ＳＥ：テレビの音（はっきり聞こえない、ガヤガヤ
した感じ）
ＳＥ：解錠
ＳＥ：鉄扉の開閉
ＳＥ：内側から施錠

【５　遠くから】
鷹司「ただいま～」（隣の部屋から聞こえてくる）

SE：鍵を開ける音
SE：ドアの開閉
SE：施錠

〈SE：室内を歩いて近寄ってくる音〉

【5】
鷹司「【甘える感じで】あぁ～…疲れた。
上司に残業させられそうになっちゃって。
かなり引き止められたけど――」

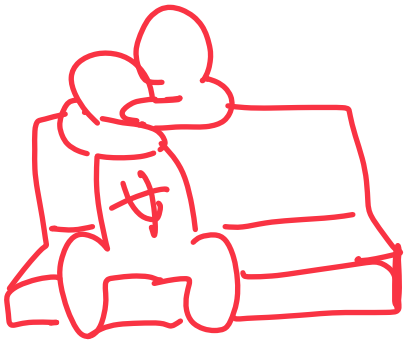
SE：ソファに座ってるヒロインを背後から抱きすくめる

【4　背後から】
鷹司「君を長いこと一人にするわけには
いかないし、無理やり帰ってきちゃった」

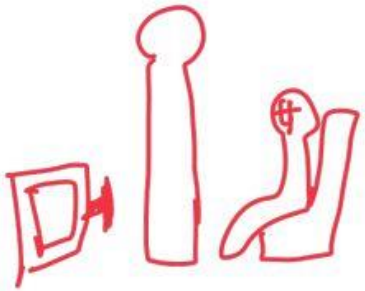
【3　顔を覗き込もうとする】
鷹司「どうして何も言ってくれないの？
やっぱりちょっと、帰るのが遅すぎた？
【不安げに】ごめんね。
本当は仕事なんてやめちゃいたいけど、
さすがの僕も、父さんには逆らえなくて……。
運命の人を見つけたなら、
それに見合う男になれー、なんてさ」

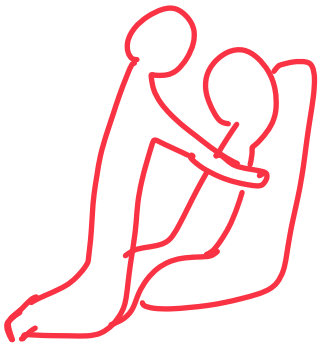
【4】
鷹司「父さんも、僕と君と同じでさ、
ある日出会った運命の人と結ばれたんだ。
父さんは、母さんのことを本当に愛してててね。
母さんがほかの男にひどいことされないように、
ずっと守ってたんだ。
僕は母さんが部屋から出るところ、
一度も見たことないくらい。」

鷹司「その父さんと母さんを見て、
僕も運命の人を見つけたら、
こんな風に深く愛そうって決めたんだ【耳にキス】」



【4→5】
鷹司「あ、ねえ、今日はケーキを買ってきたんだ。
ちゃんとお気に入りのやつ、選んできたから。
晩ご飯食べたら、一緒に食べよう」
鷹司「……ねえ、いつまでテレビ見てるの？
そのくだらない番組と僕、どっちが大事？」
【なおも無視するヒロインに業をにやし、
テレビを蹴り倒す鷹司】
ＳＥ：ヒロインの横すり抜ける足音
ＳＥ：ガシャーン
ＳＥ：歩み寄る足音
【1　至近距離】
鷹司「無視されるのは、好きじゃないな。
お仕置きで脅さなきゃ、君は返事もできないの？」
【ヒロイン、怯えて謝る】
【1　離れて】
鷹司「【困って】そんな風に怯えないで。
ごめん。怖がらせようと思ったわけじゃないんだ。
ちょっと仕事で疲れて、イライラしちゃってたみたい。
優しくするって決めてたのに…
僕、ダメな彼氏だな」
鷹司「君がキスしてくれれば、
機嫌なおると思うんだけど……
どうかな？
君からするのは、まだ恥ずかしい？
そういう、うぶなところ、すっごく好き。
いつも初めてみたいで、ドキドキするんだ。
……口開けて」
【ディープキス一〇秒くらい】





鷹司「うん……キス、すごく上手になったね。
それに……【ヒロインの秘所に触れる】」

〈SE：水音〉

【うっとり】
鷹司「キスだけで、もうこんなに濡れてる。
期待しちゃった？　今日は、どんなふうにしてほしい？
い～っぱい焦らして、
君が欲しがって泣いちゃうまで、
可愛がるのはどう？　それとも……」

【7】
鷹司「いきなり奥までねじ込んで、
まだ狭い君の中を無理やりぐちゃぐちゃにして、
気を失うまでに何回イケるか試してみるのもいいね。」

〈SE：水音〉

鷹司「ふふ……どんどん溢れてくる。
無理矢理されるの想像して、興奮しちゃった？
君があんまり淫乱のMだから、
最近はお仕置きが全然お仕置きにならなくて、
困るくらいだよ」

鷹司「頭の中はやらしーことでいっぱいなのに、
恥ずかしがるふりして、嫌がって見せて……
僕の気を惹くためにやってるの？」

鷹司「ばかだなぁ。
そんなことしなくたって、僕は君に夢中なのに。
分かってるでしょ？」

【1　離れて】
鷹司「今日は、自分から脱いでる君が見たいな。
できるでしょ？
前教えたみたいに、
ゆっくり…そう……」

SE：脱衣（彼シャツ）

鷹司「ずいぶん肌が白くなったね。
しばらく日の光を浴びてないからかな。
【ぽつり】母さんの肌も白かったな……」

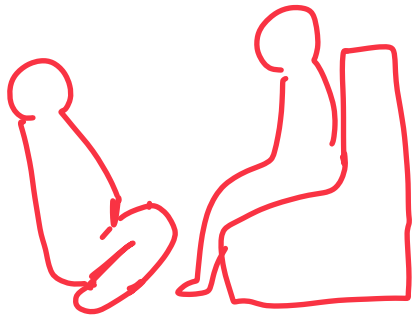
鷹司「【ほぼ独り言】食欲もほとんどなくて、
すごく細くて……僕が大人になる前に死んじゃった。
君には、そうなってほしくないんだ。
だから……だからさ」

【ウキウキした感じ】
鷹司「今度、キャンピングカーを買おうと思ってるんだ。
一週間くらい休みを取って、二人きりででかけよう。
他に誰もいない、山とか、海とか。
あぁでも……誰か来るかもしれないってところで、
君を裸で縛って放置したら、
すごくかわいい反応するんだろうなぁ」

【ヒロイン泣き出す】

鷹司「あ……ごめんごめん、泣かないで。
ちょっといじわるしすぎちゃったな。
恥ずかしがる君が可愛すぎて、ついやりすぎちゃうんだ。
大丈夫、君のえっちな姿を、
ほかのやつに見せたりしないよ。
ほら、ここに座って。
僕の胸に背中預けちゃっていいから」

【鷹司、ヒロインの隣に座り、ヒロインを足の間に座らせる】



【7　耳元】（背後から抱きしめてる感じ）
鷹司「【耳を舐めながら】いっぱい意地悪して、ごめんね。
お詫びに、今日もたくさん気持ちよくしてあげるから。
乳首とクリトリス、同時にさわられるの好きだよね。
奥の方にも、こうやって指入れて……」

SE：手マン開始（ゆっくりめ）

鷹司「わかる？
もう僕を欲しがって、ひくひくしてる。
今日は、ここととおしり、どっちでしたい？
君の好きな方で可愛がってあげる」

鷹司「おしりは嫌？　はずかしい？
大丈夫だよ。
僕は君がおしりの穴で気持ち良くなっちゃうような
淫乱になっても、愛してるから【耳を舐めここまで】」

【6】
鷹司「腰、揺れてきたね。
指じゃ足りない？
もっとおっきいのが欲しい？
じゃあ、声に出しておねだりして」

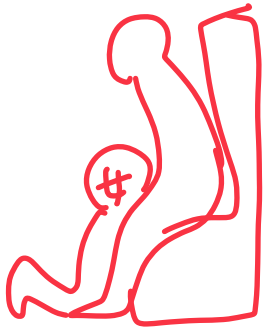
鷹司「君が欲しいってひとこと言ってくれれば、
いくらでも僕のこれで、
望むだけ気持ち良くしてあげるんだけど…」

【ヒロイン返答拒否】

【デロ甘で】
鷹司「やっぱり言えないか……
まだまだ恥ずかしがり屋さんだな。
いいよ、今日は許してあげる。
でも、こんなに君に尽くしてる僕に、
ちょっとくらいご褒美をくれてもいいよね？」

【ヒロイン「ご褒美？」】

【7　耳元でささやく】
鷹司「しゃぶって。
君のかわいい唇と、舌と、喉の奥で」
鷹司「そしたら、物欲しげに指に絡み付いてる、
君のすっかりいやらしくなった、この淫乱な穴に、
思い切り、僕のを挿れてあげる」
〈SE：手マンここまで〉
鷹司「いきなり奥まで突っ込んで、
ガンガンに突いて、イってもイっても止めてあげない。
君、そういうの大好きでしょ？
ほら、床に座って」
SE：姿勢変えるゴソ音
SE：ベルト外す
SE：ファスナー
SE：フェラの水音
【1　上から】
鷹司「あ、はぁ…っ、良い子、本当に良い子だね……
君が素直になってくれて、すっごく嬉しい。
口の中、あったかくてドロドロで、溶けちゃいそ……
うん、いっぱい舐めて」
鷹司「そんなに、僕にハメて欲しかった？
男のちんぽ欲しさに、裸でひざまづいて、
口ん中いっぱいに頬張ってさ。
ほんと、みっともない顔。
そのまま舐めてて、そのまま……」
【鷹司、ソファ正面にある机から、デジカメを取る】
〈SE：机からカメラ取ってくる音〉
鷹司「ほら、カメラの方見て。はい、チーズ」
〈SE：シャッター〉



鷹司「はぁ……よく撮れてる。
あとでみせてあげるよ……
君がどんなやらしい顔で、僕のちんぽしゃぶってるか」

【ヒロインを嬲り倒す言葉責め】
鷹司「ねえ、今自分がどんな風になってるかわかる？
必死に男のちんぽしゃぶりながら、
物足りなくて腰を揺らして、
自分で自分の乳首いじってる。
フェラだって、こんなに上手になって……
男の気持ちいいところ、全部わかってるなんて、
ほんと、救いようのない雌猫だ。
そんなに僕の精液が欲しいんだ？
口の中に出してほしい？
いいよ、たっぷりと出してあげる」

【さらに余裕を失って】
鷹司「はぁ…はぁ……あぁ、出そう……
ちゃんと、全部飲んでね。
一滴残らず、君の中に……っ（射精）」

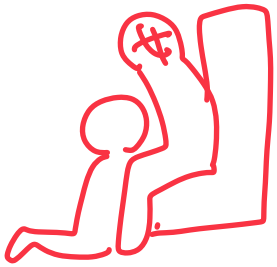
〈SE：フェラここまで〉

鷹司「【しばし息整え】あぁ……最高だったよ、ありがとう。
よく頑張ったね、いいこ、いいこ。
さあ、お口開けて？
ちゃ～んと全部、飲めたかな」

鷹司「……うん、上手にできたね。
じゃあ、交代だ。
ほら、ソファに座って、足開いて」

SE：体位入れ替え、ヒロインをソファに座らせる。

【1　下から】
鷹司「次は僕が、君を気持ちよくしてあげる」



トラック6　ずっと一緒

ソファベッドで引き続き凌辱
基本的にやってるだけです

鷹司「【ヒロインの秘所舐めながら】ふふ……すごい声。
そんなに気持ちいい？」

【ヒロインの秘所舐める音30秒程度】

鷹司「あぁ……またいっちゃったね。
でも、こんなんじゃ足りないでしょ？
ほら、早くおねだりして見せて。
でないといつまでもこのままだよ？
朝までずーっと、ゆびとしたでイかされ続けたい？」

【鷹司、ヒロインの秘所を指で嬲る】

SE：水音

【3　耳元】

鷹司「ほら……指なんかじゃもう、全然足りないだろ？
言ってよ、僕が欲しいって。
聞きたいんだ、君の口から。
この素直で淫乱な体みたいにさ。
言ってよ、早く。
言えってほら……ほら！」

【ヒロイン根負け】

【1】

鷹司「……ははっ。
うん、うん。やっと言ってくれたね。
嬉しいな。
恥ずかしいのに我慢してまで言ってくれるなんて……
やっぱり君も、僕が欲しくてしょうがないんだ。」

鷹司「いいよ。入れてあげる。
おねだりの言葉としてはちょっと物足りないけど……
それはまた今度練習すればいいから」

鷹司「――ソファ、倒すね」

SE：ソファベッドバタン。
SE：正常位に体制を変えるゴソゴソ音

【1】

鷹司「じゃあ、一緒に気持ち良くなろっか。
力抜いて、そのまま僕を感じてて」

【3】

鷹司「挿れるね……」

〈SE：挿入（水音）〉

鷹司「あぁ、すご……
わかる？
僕のこと、どんどん呑み込んでってる……」

SE：水音開始（BPM100→180くらいのテンションで）

鷹司「あ、ヤバい……さっきイったばっかなのに、
もう出そう…！
そんなに締めないで…お願い…
気持ち良すぎる…こんな、すぐは……
ん、だめ、腰止まらない…」

鷹司「あぁっ、ねえ、わざとやってる？
だめ、こんなのカッコ悪い……！
ヤバ、もう無理、ごめん、あぁっ（射精）」

SE：ストップ

【けだるげに長々とため息】

【1】
鷹司「【恥ずかしそうに】ごめん。
気持ち良すぎて、我慢できなかった」
【抜かずに続ける】
〈SE：水音（BPM90→120程度のテンションで）〉
鷹司「でも、全然、まだ行けるから。
あと五回でも、十回でも、
君が嫌ってほど満足するまで、
いっぱい気持ち良くしてあげる。」

【7　耳元】
鷹司「ねえ、僕のこと好きだよね。
こんなに濡れて、こんなに気持ち良くなってるんだし、
僕のこと、心から愛してるよね」
鷹司「【自分に言い聞かせるみたいに）そうじゃなきゃ、
嘘でもおねだりなんかしないよな。
君は、僕に嘘なんかつかない……恋人なんだから……」
【自嘲したあと、穏やかさを取り戻して】
鷹司「……ごめん、ちょっと不安になっちゃって。
変な話は、やめにしよう。
僕は君の愛を疑ったりしないから」
SE：水音加速（BPM150程度）
【1】
鷹司「ほら、気持ち良さだけに集中して。
君の中が、嬉しそうにうねってるのわかる？
僕、これ大好き」
鷹司「君が一生懸命僕の形を分かろうとして、
離れたくなさそうに、きゅうきゅう締めて、
愛されてるなーって感じがするんだ」

鷹司「あ、あぁ……すごい、締まる……
ねぇ、イってる？　今、イっちゃった？
あはは、すごいエッチな声。
イってるのに動かれると、すごいよね。
うん、もっと僕のことぎゅっとして？」

【3】

鷹司「だーめ、やめないよ。
もっと気持ち良くなれるでしょ？
壊れちゃいそうなくらい、なんども、
なんどもイかせてあげる。」

鷹司「あはは、気持ちいいの止まんない？
わかるよ、ずっと中がビクビクしてるもん。
怖い？　大丈夫だよ。僕がいるから、
このまま、何もわかんなくなっちゃおう」

【7】

鷹司「【耳舐めながら】ずっとイキっぱなしだけど、大丈夫？
何回イッたか、自分でも分からないんじゃない？
もう限界？
でも君のここは、僕のこと離したくないって。
僕もまだ足りない。全然足りない。
今日は、気絶するまでイっちゃう日にしない？
【耳なめ終了】」

【ヒロイン、必死に嫌がる】

鷹司「泣くほど嫌なの？　仕方ないな……。
じゃあ君からキスしてくれれば、
今夜はおしまいにしてあげる」

【ヒロインから必死のディープキス長々】

【1】

鷹司「……いい子。僕も大好きだよ」

SE：水音加速（BPM190 程度　キャストさんの呼吸に合わせる）

【鷹司、30秒程度吐息のみ。ヒロイン痛めつけるような激しさで凌辱するイメージです】

鷹司「好きだ、好き……愛してる……！
何回言っても足りないくらい、愛してる…っ（射精）」

SE：水音終了

【7　耳元】

鷹司「よしよし、今日も頑張ったね。
僕もすっごく、気持ちよかったよ」

【7→1】

鷹司「……あぁ、せっかくたくさん注いだのに、
ちょっとこぼれちゃったね。
もったいないなあ。
知ってる？
君のお腹の、一番深いところ――
子宮に入った精子って、受精に失敗しても、
そのまま体内に吸収されていくんだってさ」

【1】

鷹司「つまりさぁ……君に食べてもらえなくても、
君を毎晩抱いてたら、
僕は君の一部になれるってことだよね。
今までどれくらい、僕の精子は君に吸収されたのかな。
まだまだ、全然足りないよね。
次は、一滴もこぼさないように、塞いじゃおうか。
猫の尻尾みたいになるやつとか、可愛いと思わない？」

鷹司「猫みたいなやつは嫌？
じゃあ、あとで一緒に考えよう。
どんなのが君に一番ピッタリ似合うか。
君のために特別に作らせるよ。
どんなものでも、いくらでも」

【急に朗らかな雰囲気になる】
鷹司「さぁ！　ケーキでも食べようか。
紅茶を入れてくるよ。
ミルクもたっぷりいれて。
君はいつも、どのケーキにしようか
ものすごーく悩むから、
全種類用意しちゃった。
一口ずつ食べて、飽きたら残しちゃっていいよ。
僕が全部食べてあげるから」

鷹司「じゃあ、またあとでね……愛してるよ」
【軽いキス】

SE：遠ざかっていく足音
SE：金属製の鍵を開ける音
SE：扉の開閉
SE：施錠

おしまい！